

日本の禪語録 二

道元

寺田

日本の禪語録  
二  
道元

寺田 透

日本の禪語録 第二卷

道元

定価 一八〇〇円

昭和五十六年一月十日 第一刷発行

著者 寺田 透

企画編集 株式会社 講談社出版研究所

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京八一三九三〇



印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©寺田 透 一九八〇年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

日本の禪語録 二 道元



# 目次

前文 ..... 5

●

永平廣録 ..... 29

訓読および現代語訳 ..... 31

第一 ..... 33

第二 ..... 123

第三 ..... 193

第四 ..... 255

第五 ..... 323

原文

.....  
401

第一

403

第二

425

第三

442

第四

457

第五

474



道元略年譜

492

題字 古田紹欽

# 前 文





ここに道元の上堂語、小參語、法語、頌古、偈頌などを収めた永平道元禪師広録の訓読文、現代語訳、及びその原漢文を、『日本の禪語録』の一巻としておく。差当り前半を。

内容見本などの広告には永平広録の名で出してあるが、それは略称で、正しくは永平道元禪師広録と呼ぶ。全十巻。それには、その第一に相当する興聖禪寺語録(嘉禎二—寛元元年〔一二三六—四三〕のもの)、第二の途中までに当る大仏寺語録(寛元二—同四年〔一二四四—四六〕のもの)が含まれていて、永平広録とだけいうのは実は中身に合わない。しかしかなり古くから行われていた名称だし、中国の古禪僧にしてもわが平安期の宮廷人たちにしても、晩年の住山住寺の名、もつとも後の身分、位階官職などの名で若い時代のそのひとまでを指すのは、史的呼称として普通であり、永平広録を読むつもりであけた扉の向うに永平道元和尚広録があったとしても、別に驚くには当らない。

この本はこれが属している叢書『日本の禪語録』の既刊分十数冊に比べて、色々の点で異風を呈している。その根本の原因は永平道元和尚広録がきわめて大部のものだということにあり、さてしかしそれを自分の評価に基いて抄本にしたて、これに対する訓読文、現代語訳を作るといふやり方は色々の点で筆者の非とせざるを得ない行き方だからである。

第一、道元のように何はともあれまずその思想や信仰の全容を知らねばならない存在に対して、そういうやり方をとるのは、語録の主干道元と読書界の双方に対する裏切りだということがある。書中に問題提出の疎雑未熟、表現の缺陷、同一主題同一表現の頻繁な重複、さらにそれらの限られた短期間における連続的、慣習的出現という少々微笑をさそう例も、語録の主の隠し立てや削除や修正によって守られたり、美化されたりすべきでない真の姿である。

またたとえば、上堂語191201の「健かならんには坐し、困ずれば眠る」という提唱とか、主に中国語で「御僧ら御機嫌よろしくて何より」とかいう挨拶語による暗示が196206218250、広録第三に入っているにわか現れ、その後絶えてしまうことの確認や、その意味についての無垢の考察などは、他人の作ったテキストを本にしては出来ない相談だろう。

二番目には、というよりこれが根本の理由かも知れないが、どんな形にもせよ、道元の思想や信仰の表現に変更を加えていいとみづから許すには、筆者は自分と道元とのあいだに、あらゆる意味の懸隔がありすぎるのを知っている。

しかしそういう態度でことに臨むと、永平道元和尚広録は、最初道元のために豫定されていた一冊では到底収録しきれず、ほぼ折半の上、上下二巻に分けても、その前半だけですでに他の禅僧たちの一巻よりはるかに厚いものになる。

それがこの巻に先行諸巻と異り、三段組みをやめ、二段組みの体裁をとった上、註を見開き二頁の左頁左辺に収めるといふ、形式上の一大変更を持ち来させた理由である。最下段の註の欄が白のまま

遺る不経済を筆者はなんとか避けたいと考えたのだ。各禅僧とその語録類に対する諸学匠の入念詳細な「解説」が掲載されるしきたりだった先行各巻のこの部分に、単にこの通りの解題風なものしか載せないのも同じ理由による。

しかし道元とその広録について詳論縷説を惜しむのには、そういう経済的理由の他、筆者自身の内的動機もある。

かりに筆者がここで道元に関して伝記風のものを書いてみても、それは先学の業績を借用し、どうやら筆者らしい見解で整理し体裁をととのえたことの羅列の域をいわず、新しいことがそこに盛りられる筈はない。なんら新しい知見を読者に伝ええないものを書くのは、たとえ場所が与えられても、道元程高名で、すでにさまざまな研究論及の捧げられている存在に対してはなすべきでないというのが筆者の信念であり、またこれ一冊あればすべて分る式の書物の制作発行ほど、著述と読書、また各人の真正な知識の墮落と形骸化を持ち来すものはないと筆者は考えている。

筆者としては読者が和辻哲郎著『沙門道元』(岩波書店刊全集第四卷)、大久保道舟著『道元禅師伝の研究』(筑摩書房、一九七六年修訂増補版)と竹内道雄著『道元』(吉川弘文館、一九六二年初版)などを繙いて、この種の問題に対するその求知心を癒されることを望む。竹内氏の本の年譜には道元の中国における遍歴修行のあとが、古伝に基き、概略記されていて、今後の道元伝の重大課題の一つがなんであるかを暗示しているが、この課題の十分な解明が可能かどうか、可能だとしてもどれだけ可能か、筆者には判断もつかず、自分ではまったくやれる自信がない。

大久保氏の研究にはまた中国に渡つた道元に武士の従者がおり、これが日本に製陶術を伝えた瀬戸の加藤四郎左衛門景正だという興味深い事実も記されているが、とういうことも筆者には追吟味、確証の方途のないことである。

道元は歳十三で出家し、比叡山の横川で修行得度の後、二年経た十五歳のとき、顕密両宗がともに説く「本来本法性。天然自性身。」の宗旨に疑いを持ち、「如自本法身法性者、諸仏為甚麼更発心修行三菩提之道（如し本自ら法身法性ならんには、諸仏甚麼としてか発心し、三菩提の道を修行する。）」という問いを、三井寺の公胤僧正に呈するため山を下つたと言われている。そのとき公胤はみづから答える代りに中国に仏心印を伝える正宗のあることを教えた。後の三井寺長吏の学僧公胤が教示をあえて避けたのには、かれがすでに法然に帰依する浄土門の信者であつて、聖道門にかかわる指示を行うことを信仰にそむくこととして嫌つたのではないかなどという興味ある考察もあるが、いずれにせよこれが機縁となつて道元の渡海が実現する。しかしそれに先立つてまず建保五年（一一二七）、かれは京の建仁寺に明全に参じた。

このとき道元が榮西に相見しなかつたかどうか、専門家のあいだに未解決の問題があるらしく、いまだに話題として蒸返されるが、右の事実や語句を伝える永平寺三祖行業記や、永平開山道元和尚行状建擲記けんざいぎにそれは出ていない。

しかし前者は応永年間（一一三九—一四二八）までは存在の知られていない伝記であり、後者は永平寺十四世の建擲（一一四一—一四七四）がその本山住持中（一一四六—一四七四）に著した伝記で、それぞれ道元

没後一世紀半乃至二世紀餘のちの著作であることを無視はできない。

右の道元の疑團をあらわす文句（三祖行業記では「本来、本より法身、天然、おのづから然ある身。顕密の両宗、此理を出でず。大いに疑滯を有つ。如しおのづから法身法性ならば、諸仏甚麼と為てか更に発心修行する。にしても、これに対する建仁の誰かのありうる答え、それどころか道元が建仁寺でさらにこの問いを呈したかどうかについての記述もなく、これらのことがそれらを伝記としてあくまで尊重していいものとする上で妨げになる。

しかしその疑問が道元の終生の問題だったらしいことは、「正法眼蔵の思惟の構造」（岩波書店刊『道元の言語宇宙』所収）の中でも、眼蔵画餅の講読（朝日新聞社刊『日本仏教・この人と思想』所収）の中でも言っておいたのでここでは繰返さない。

ただそれが、只管打坐という指示によってしか答えられない種類の問いであること、しかしそう答え、またみづから行じて、それが十分な解答であったかどうか、解決のための方法でありえたかどうかには疑問があり、それがこの広録という書物を読む上での眼目の一つをなすだろうということは言っておきたい。

「即心即仏はなはだ会し難し」「即心即仏いづこにかある」と唱える319を先駆けとする形で（それより先280292にも例はあるが）、321323354365368等、第五まででも「即心即仏（かの心、ここに仏）」がこのようにしばしば断案を得ないまま繰返し拈挙されるのは、この問題と結びつけて考えることの出来る一徴証とされよう。

それはともかく、貞応二年（一二三三）中国に渡り、四年の歴参修行ののち帰国した道元は、寛喜三年（一二三二）深草の安養院で、正法眼蔵の巻頭におかれるのが習慣となつてゐる辦道話を書いた。

その冒頭、「太白峰タイハクホウの淨禪師シムゼムジに参じて、一生参学サムガクの大事ジツこゝにおはりぬ。それよりのち、大宋紹定のはじめ、本郷ホンキヤウにかへりしすなはち、弘法救生グホウクウシヤウをおもひとせり。なお重担ヂウチムをかたにおけるがごとし」と記したかれは、それによって自身の仏法普及、衆生済度の念願をまさに語りはしたものの、つづく記述で、その語りかける相手が、「参学閑道の人サムガクカンドウ」、すなわち「おのづから名利メイリにかゝはらず、道念ダウネムをさきとせん真実シムジチの参学サムガク」、言いかえれば出家に限られることを表明した。

同じところに「貧道ヒムダウはいま雲遊萍寄ウモンユヒムシキをことゝすれば」とあるが、この頃かれの下に僧団はまだ形成されていなかつたことを考えると、この表現の意味するところがどういふことか、あらあら察しがつく。ましてそれより前に同じ言葉を用いて、「弘通グツウのこゝろを放下ゲキヤウせむ激揚ゲキヤウのときをまつゆゑに、しばらく雲遊萍寄ウモンユヒムシキして、まさに先哲サムテチの風フウをきこえむとす」とあつたのを思い出せば、この頃のかれは、かれ自身の修行のため、もっぱらそのために、坐禪行脚をしていたと分る。

永平道元和尚広録に収められる上堂語のうち最初のもはこの五年後に述べられ、それを皮切りとして、それ以後の上堂語、小参語がすべて僧侶たちのために述べられたのは当然だが、それより早く辦道話がすでに、今見たように出家求道者の再教育を本願としていたことを忘れて道元を論ずることは不当だろう。

それ位だから、宝治元年（一二四七）中秋から翌年春三月まで山を留守にしたかれが、鎌倉で檀那

俗弟子のために一体どんな未聞の法を説いたのかという、帰山後のかれに詰め寄る疑問に対して、ただ「善を修むれば昇り、悪を造れば墮つ。因を修めて果を感かせ」（上堂語25）とだけ語って餘法は説かなかつたと釈明したのは、詐りを含まなかつた筈である。

前年、後深草院の誕生日に、帝位より仏位を高しとする思想24を表明したかれが、執権時頼にすすめるべく大政奉還を考えていたなどということは、ありそうもないことだ。

鎌倉名越白衣舎示誠なる遺文も、阿闍世王の六人の家臣のあいだの問答の形で、修因感果をすすめる教誨以外ではない。

辦道話からいきなり鎌倉遊行に飛ぶのはやり方が簡単すぎ、乱暴のようだが、筆者には、道元は対世間的には何もしなかつたひとだという考えがあり、中国から帰国後かれの行った唯一の顕著な対世間行為がこの鎌倉行だったと見える以上、こうすることに十分な理由がある。

道元にも有名ではないが遺偈とされるものがあり、それを建擲記は、

「五十四年。照第一天。打箇跣跳。触破大千。渾身無覓。活落黄泉。喫。」

の形で伝えている。しかしそれを、典拠の一つであった筈の永平寺三祖行業記は、

「五十四年。照第一天。打箇跣跳。触破大千。喫渾身無覓。覓活陷黄泉。」

の形で伝える。筑摩書房版全集における大久保道舟氏は、「喫」という感歎詞を「触破大千」と「渾身無覓」のあいだに移した上で、建擲記所伝のものを採用しているが、御自身の『道元禪師伝の研究』では、建擲記巻下を出所としつつ、「喫」以下を、「渾身無著處。活陷黄泉。」の形に定めている。



どうしてこういうことが起るのか、門外漢は従うべき文に迷わせられるが、おおよそ共通のところを訓読すれば次のようになる。

「五十四年、第一天を照みき。箇の跽跳を打すれば、触破さる、大千は。嘆。渾身覓みむる無く、活きながら黄泉に落「陷」つ。」

このうちの最後の二句は「このわが身はどこをとつても、行き処を捜すなどということはなく、生きたまますでにあの世行きだ」という意味だろう。

如浄の忌日にしばしば道元は、師が現世からひらりと飛び立って解脱を行ずるのを見る偈を作った。広録に遺されている偈をたどればそれが見てとれるが、今自分がそうすべきときに臨んで振り返ると、自分の眼にまず映ずるのは、生涯一途に最高世界を觀照しつづけて来た自分の姿である。そうしてひらり飛び立てば、世界そのものにぶつかり、それを瓦解させて、自分も解脱するし、世界をも解脱させられる筈なのに、嘆（なんと）、自分は生きながら死後の世界にすでに落ちつつある。

筋を通そうとすれば、こう読むのがもつとも適切だろうこの偈の内容は、あの十五歳の疑問、「如自本法身法性者、諸仏為甚麼更發心修行三菩提之道」に対する四十年後の別の答えと見ていいのではなかろうか。

いくら修行を重ねても、死に臨むとき人間を待つのがこのような事態であるとする、修行しなかつたら、たとえ「本来本法性、天然自性身」であるにせよ、ひとはどんな有様で死を迎えねばならぬか。